古今采雅抄

席末

いつ年百乃代くのみとまき乃花の匂ひ月の秋こと
にさそふ女人くに成給てあとふつまつく寿をたく西
門くしめ給ふ

といへいまくの代く乃御門とそ時代をさくそ。上古乃
賢王聖主乃代くひさしく西成給ひ一時の
ぞうくしく言の葉もまこと花をくさくらし一代をこそ乃も
の朝。秋の月乃秋。花月の形をとをこそ。歌をとをまく
しめ給ふと也。されとも橋統文武二代をとろきはやは
さくずいくくや。山二代八九出現して歌あり。元明
天智第四門女 元正 文武 女 され二代をくの。聖武寿き。人九五帝
よ法くへをくとくを西。天武帝宮。桓武元年よ。人九出
世くく。聖武の代御神亀二年三月十八日に卒をス

帝乃同四十二年なり

あるは花をそこなふとそこなはたるものを紀所ふまとひたりし月
をおもふとてたるへうなりやうふたとれる
とは花をそこなはとそこなはを花をたてとてたるもを
求ふとてなら花をもあるなり
ものをもちたるさ所ふまとひとりし月乃
歌なり文徳紀御ぞ思ひをもとめぬ
ところの花月を見ぬるをもとめるなやふたと
おもとたれを寿の四をとなりなんふ仙
仙宴小蔬ねもぬべ一桜花ものさひよ家法ひをれて
月雪よいもぬ人まもるかさ屋面をもるむ僧ことわん
ものとは絵ひをくしたり地ろもとまりりり宴

ふ花月のたもあるをもあるなりたもの
をさをを絵をを絵ぞ紀ものなりと人の賢をを
ものあるをなりあり
をはかくをも加以とも古かくのごとくたるよをにあ
ぞとものをぞ絵よは申絵紀ひさを動てうまり
たれるよをを人
とは絵ををく
紀をものちをにやちをふ細のいををなりて昔のむをを
をみぞ代をものをあるぞをあはは拾遺集よ安法く師
が方ものの集よは名ををたるをを
はくを山よは宴をを絵をれるひ

はくぐまのこれもものをにはかはあれど老の花ぞ春まちがほなる
よ侍こびかるはぐさ山もれ　ひてろるよあまち
うれをを行よたとふむ廣夜袂ゆうふたてといを海を
姫さ祝むーい神ようつるんろうこひ月をひまをろあろ
ーのろうようへて人をまひ
市ゆよるあ風よをえをえ神ふまるぬむ一煙を
松むーの青ふ友をたれひ
元恵一芋ひやけるゝ神ゝ山ゝとハ松生乃ひそうれーうまろ
秋聖ふ人松むーのおうを迎祝とゆさていさとふゝん
言砂ゝとんの江乃松をあひ和乃やうふ和ろえ
ゝろ伝ごゝとれ江ゝ幡州。あ玉乃松のえ不を呼
出ゝく西所乃松をおゆ乃やうにおゞあうゝとゝろ。幡州

言砂乃松とうふゝ。ゝろさごとうふ不の濱つ紀よ松の
一村あるゝを言砂の尾江乃松とうふゝ。ゝろれを俤宝づひ
おゆ江ゝとくゝうー。敏昭神中抄よ注まりつひよ言砂を
ーうゝ。山ゝ西ゝ迎ゝ西ゝいさごゝ法ゝをりて山ゝとゝろゝいんよ
ゝ乃ゝ。後撰集ゝ手ゝ恋性言
山言ゝいゝをゝいゝをゝん言砂の尾ゝ乃さゝゝをりて、さゝむ
江歌河言ゝよ。花山言ゝ言ゝくゝあゝゝとゝ言
幡州言砂ゝて苺京義宣が。後拾遺集よ
我のゝと思ひ、ーゝと言砂乃尾のえれ松ゝまゝこたてゝゝゝ
おゝの一集よ。相方和尼言ゝふ
言砂ゝゝたくゝゝゝひゝて苺ゆメー尾江乃言ゝくまゝ江て言ゝ言
作者和琴のゝ言ゝ言ゝ言

あれで播磨国高砂とうたふのの名也。山彦よいあらざろ
ようやをみの江ぶねよあるぶね
すまうみのなかをぶねこぐあまの釣をぶねこぐ
山ぶきを後撰物名とうて
わたつみの世界よりしぶき伝らしれ松のたつえとあしの白波
たつあらぬくとれること
あさくらあるあ人神のわまを思へそひさしすまうしれ松
これを伝若乃神まよあひひおひひ乃松とうをとあるうや
我とく神代のまもまうこへたん芋をとをまうとかしれ松
おとこ山乃むしとおひひ物て女郎花の一ぶをとうまうも
歌をいひこうなくさあるうぶ
今こうあれ我もむしへ男山さうゆくぶをあうこ一枝を

私私聖ふまうめさたてる女郎あうし逢花も一ぶ
山あ貫乃こうこうこく男よ女郎花一てうこうぶこも男
寿へ男乃遊世乃とぶ。むしへ為なれぞ引よ勢たる也男山の
ぶんむの三のへ。をこうへしの名ふなたうあうしあう。女
をみいひしかましくみ思れど花をこぶ一ぶのかと
にくあるぶと。女のさうう乃程る紀事を男乃そ
みうよしたら男山乃芋をおもひをこうへしの
一ぶ紀くるうも寿といひくぞこうをなぐさむ
と。歌乃座をうさたる也
へ。まれ物よ也乃ちうを月私の夕よ再来乃義乃義うをさく
郎花義の云常をうまうや。まの物よ私の夕義

乃ちうにあ素の流る。假字ふてうろ物なれど將
てうまちぱ何耳目よんさく所おそれよものさびさ
ふ文章たち
ろ蝶乃世ともにうれ採むさくと乃ーまふうちちあうろ
吹風の気ちくさふ乃ん乃ん法ハ秋の末素乃ちれハちうろ
秋風よあんとちちあうる紅紫と乃ゆく色完めぬ我てうのさ
ぱうたなどを知りひうとへてうろうや
あうはうことふうみの新よ乃ゆう言と流とをなけさ
うと玉乃我ろうこうや乃ん筑の新よあれうたう言
筑のうぎうよ乃人ゆう言ハ白髪なち沼ハ面乃ちハうる
胡泳よ大公望周文渭濱波夢面とあう法華経
隨喜功徳品よ見彼裏老相髪白而面皺と法ちうう

ぎま乃落水のあとをみて我乃をおとろさ
乃をとうとこのうう物と思ひうん我乃も夢にとうぬ汗を
うさなううまあう泡ともちうなうん流てとふれまあ貴
ぱあ貴乃ところ世上のあぐうう物を乃て我乃をおどろく也
あうとうさふ人ゆうおうてゆをうーちうひ
世界ハ何のうちあう花多門とうの乃閑とうふハ影よあう
盛者必衰とてさうるねぢおとうよなうひたう
世ようとひうとうーうーもううくうう
芳みーー人をそいうハふ乃ふ物金山のちうあうろうよ
世ようとびあれぢとうーさ中もうくうなう事門
まーぢぱ集うよあれの哥みうす
あうう松山乃浪をうまぢ聖平の水ぢくを

ものとをきてあるべしと世をいとはしく思ひ入
いろ〳〵の世事に心をかけずして
世を捨乃下系図なるべし

あさ萩乃ちるを見ても行く今ぞや独る人のいのちとはる
あるべきなれ暗のちるあさ〻〻

暗のちるを見ても紀百姓のさきをあ萩おろかなるく
いろを見行のうれをを人ものひ

世をふれてあるの際ちるを見行のうきを思ひとゝ嘗そ嘆
し乃川をひきて世をとうしきうは

古聖所のしや人をたゝうあをやくいとひて世ハ三道
流てをいを世乃山の中におつるとゝ川のゝしや世事

大方間の典の書いづれを席ハ宗乃まを表をろ聖人

なれど席よりゝ勢所河のちゝく。ぢう西家のうちう
とゝのふゝりて。ぢ寺たどやとて古都と宏壮乃人物
動べきを和たち

ちゝ富士乃山を懐ちゝたちゝの橋ちゝたるゝちゝまく
人ハ寺にのゝをあゝちゝをなくさあゝろ

とハ。あれを世事乃むゝにゝろまを以富士の山を
ゝちゝ乃あゝんだたゝろが。今ハあゝどなゝゝ乃ちゝハ

ありゝくゝをゝたゝろが。あゝゝゝくにゝろちゝとゝく人ハ
ぢゝの事を考ふゝゝたゝ。ぢ。歌ゝを世をなゝくさあゝ家ゝや

いゝん科也。世乃山を懐ゝ懐ゝ多ゝとゝいゝよ。不立不動
乃二ゝのゝゝろ西。不動をたゝどゝゝ仏寺

拾遺集通脈寺

かゝ侍えゝ小一むゝ侍まろハ松のくゝみをそゝぬるゝゝ
堀河院百首公宴 寄
をゝ侍て侍まこゝろつむ炭そのまゝをたゝぬ大系式部
後拾遺集和泉式部 歌
さゝ小鹿をゝふを志ゝ
恋多丹 雅経 寄
時ゝぬたゝゝひと今をたゝゝゝや煙ふ雲むしのゝ
右宮首逸服公実 寄
ゝやゝゝあゝ雅経たゝゝゝ

出家あれ御法あるべし。あるいは民間に入道。不立不断のまつりは
信あつまりまをさせられ作やくむ。家乃流布のまて無
とある古歌乃心をもて。あるいは人不立といふ。累祖まれなる
にくいぐ思されなるむとひろまる也
也病稽乃事。國史よ。弘仁三年六月使と
たちまちてちぐらのそこ。とつると注さる。弘仁三年より
延喜乃御世まで。九十餘年をとるべし。
世中にあるわる物は法の函乃ちまこの稽と。我やさなりうう
どもみくだぐらのもちあるものとかいふを。伊勢が
うふ
法の函乃ちまこ。稽もつる也いとい我身とおのはたくむ
ぐらとあるべし序よりとるとあのぐ伊勢ぐ。むすこ

かるうたる風情よりく。富士乃烟をたちそとく紀をせう
まや。經伝にも病稽ハ。ちまこ。のちをとをさだう人たち。
たちまちといちんを。下乃事たち。知くなくべしや
後拾遺よ。信あるうしと也。後拾の中後恵法師を。
ぐらのもちれぐらんを。
たちまち。宮家に筆ふみえちぐびよを
蜜あり。宇治の殿白乃幸ちく。稽上月の影うて
慈園寺
ちまこも宇治乃ちまこふをむ月をも病乃稽のふ乃
とある也。投ちしの板乃文蜜をやちくみると人の
ちまこ。又拾遺伝よ。天暦の御時御屏風よ。ぐらの
ちまこの稽程。ぐのかとあるうるを。菅原清忠

うゝふ
芦間ゝうみのうゝれゝ拝芳乃江の志ゝへゝゝうゝう
ゝゝあゝ。延喜の御時ゝゝゝ

和銅三年三月よ若宮乃宮ちうふうしたまふと
ぞ乃あとゝ元宝をおさめていまゝ者あらはみえたも
おくむ。第廿文彩古今よりれら　かのおちん世不
寺のこゝろ紙ゝ。ーあらんとらくゝ文武とさ
てうきたる心ちり
かれおちんはるおねさこゝ乃くゝゐ稀ゆの人まちたんこの
乃ひーつまちうゝあれを者も人を男とあを物ゝちち
といふなるへー
とゝ文武乃御時人丸寺のひーつをうとゝ歌仙を
歌乃聖頭といふ心ちり。此御時人丸世冥の年也りさ
乃ゆハ。姓氏録云家門乃おゝ稀まあふふりて稀ゆ

いゝ人丸正三位乃事公卿補任にみえず。されど此集に
ゝまちゝ上ゝ。ゝちゝ。ゝちゝべきゝゝゝや。乃ゐ乃并栄雅。柏軍家
ゝゝく御後乃時六位をゝ門の位とかゝちゝゝや。陸奥
をみちのくゝいひむけをゝうとゝみをなれだうまちかと
なり　あれを者も人を男ゆあを物ゐりとゝハ
者民合稀をゝまち。持統の御時。人丸十二三ゝち。文武
乃御時ゝ。世冥ゝゝく帝崩ーゝゝ文武よりゝへて新田
ゐる市ゐまにあつゝとゝん程。猿澤池の御幸にゝゝぶひ
て。　わをゝをゝがねぐあれぐゝをゝち沢乃池のゐりみ
あゝゝゐのきゝとゝゝみゝくゝ。ゝ御技御時ゝちゝをひゝゝ
ゝふゝゝといふ人丸ゐ帝ゝゝゝゝ。ゝれくゝゝゝの方ハ。
文武乃御ゝゝとゝやいあゝ。人丸宮位をゝまちふ登り金

紫英縁ニ席ニ刷ニ蓮府槐門ニ夜ヒトツ。金紫英縁ハ
所師漢乃唐名なり。蓮府槐門も官位乃唐名也。三大
臣乃異名なり。亟相甚三府槐門大相国なり。此人丸ハ妙
音菩薩乃化現とやらむいつると。基後後成写。天ヶ
とて伝へる迄なりと。宮家の名ふあり。人丸拾遺集
ヲ可あり入唐ヲとていつまでとべて雪ん。拾遺の
誤也。人丸ハ帝につかへる。天武の御時乃年号朱雀
元年ヨリ人丸出世。持統大化六年大長 みよしの御十三也
文武大宝元年 大宝三年 慶雲元年 元明和銅年 元正霊亀二年
養老七年。聖武神亀二年三月十八日人丸四十二年ヲ
人丸卒。其後二十九年。孝徳の御時。天平勝宝
元年ヨリ万葉集ヲ九大臣橘諸兄撰ス。人丸四十二年ヲ

不見ヲ。ヒトツ。陸死乃内ヒトツ。あ
かを山乃岩ハ。ヒトツ。我ヒトツ。ヒトツ。ヒトツ。

ちぐさの乃名れを雅平乃んとしたるハこれをもの乃ゆゑ乃ものゝ
ぶりとかなとを但さゝらをまうらをたんかゝるゝとゝ云
哥みゝゝぶとぶりの一回乃流也投家集治定と弱めべし
後撰集よ閑名のうゝふ
みゝしぬゝ吉野乃山のさゝ雪とゝ乃ことみんさゝひけゝ
ゝれたゝ序のこゝろとゝあゝとみゝたゝゞ又ゆゑ郷屋ゝ
人丸乃賛よ一条摂関ゝ
ゝゝゝんゝしぬゝ猶雪とゝみゝやゝと須ハありやなゝやと
おゝゝゝ人のゝゝゝゝゝこれを世人丸ゝめよハ乃歌ゝ
とゝゝゝたゝゝれゝ禅閤ゝゝて吉野ゝ又集ゝみゝ
ぬ事とゝ序よハゝゝれだおゝぢゝよゝゝゝゝみゝを
わゝゝゝ新古今の序よゝ又ハゝゝとゝひゝゝ神ゝハゝゝ

部云とかゝゝゝ事よ歌みゝとゝて天章とゝて後ゝ
ゝゝゝゝゝ

ようて神亀三年丙寅九月播州に御幸の時
ある歌仙万葉よりあらはされて人丸乃後まで
人麿赤人の官位名聞ハ
山邊赤乃人麿彼所ハ廟窟寺とて
ハ也ハ所ハ栗栖長一尺ばかりの石に栗
なりとハ玉乃位人物ぐらあれど今ハ石ばかり
人丸とぞ此道の先師とあがめ奉る寄仙と
いつべきなりとハ赤人と云也

龍田川もみちゝ流れてなかるゝ
めりとハ流るゝ流るやたゝの人
見ぬ　人丸　物ぬ見ぬ
見ぬ　ハ久ぬ乃あ歌ぬ雪のあてあまてを　ありくと
あゝの浦乃鶴ハ鳴ふ声ハ加
れゆくあしの引ハ

赤人　吉野に雪ハ降ふ野をあつ
一面わよろ　わの浦よりあ
面ぬ雪ハ降ふ
春の野にすみれ摘ふて
ゝくおもひて一面わ
ちゝて深なくるれど苔
あと也ぬのゝらくれど
を高ようおもひよりて
此人ゝとをゝて又をくれ
ちゝかゝとのゝらくよゝ
とハ人丸赤人ををゝて
はゝ河ふたゝびあゝ

ちりといふん歌也
ちはやぶるとは神の事をあつめてちん万葉をとるつもり
也たりなり
とは所をわちさる也。万葉ふるしらけるさしてて万えうを
えらびく河の事をえ。万葉集を。平城の御代女孝謙
の代に天平勝寶五年より并に大伴橘宿禰兄勅とう
あて撰ぜる也。一世の前尾をぜんく。廢帝稱德天皇
桓武五代をへて。平城の御代に撰定おりて。大同三年に
世よ流布をとゞめ序よ前平城天皇詔侍臣令撰万
葉集自余第時歴十代数百年とうたれど
平城の御代に撰といふ歌ひとり八雷宮殿よ并数に
よ三百十五首也。内但万葉五百五十首。内但万葉五十

首也。孝謙の御代に撰ぜしとうたれ
序にみえたる平城乃代に撰ぜる歌ひとり。
貴ちく万葉を孝謙の御代に撰ぜる歌と
聞へ世よ流布をとゞめ平城乃代に撰ぜる百ちく
十代を十次とかぞへ。よくあらたまる也。孝謙ちく延
喜までハ十五代たり。天平勝寶五年より。延喜五年
を百五十六年をへたりとあり。
とゞめくやちくと出たる。孝謙乃代
平城ちく延喜まで十代と。十次とかぞへ。平城治世
弘仁十四淳和十仁明十七文德八清和十八陽成八光孝三
宇多十醍醐御五位の後九年。合て十代たり。年八百
一年たりと。百ちく歌あるといふ。孝謙の代に撰

撰ばれたるものとを合せて百五十六首とぞあるなりとぞ
ぞ字序ふも数百二百年ばかりとぞきこゆ。俗とりて和
歌心を入たりけれ。万葉集は真観僧都文屋康秀と
て万葉をいかでなりにつくりかへるぞと同名のつ
かへる月日ありとぞ。万葉集の作者は撰也
ことなりけれと養ぞなれど。万葉集の作者は撰也
とあり。孝謙の作なるべしとおもはるる
孝謙より清和までの十代を百年あまりなる
なれど。同名作者なるべし。むしろ言葉女
帝の作代天平勝宝の大臣橘の家よりは
太史曾編集ぐ万葉集と撰ばれたるとぞ。国史の正文
をあらざれども。世継物語に一条院の比なる物語に

なりぞとぞいひつたへぞ。万葉集を作る人。中納言大伴家
持卿の勅をうけて撰ばるるや。法皇は天平勝宝
元年より卒年まで撰ばれたれど万葉集は大弁までの
万葉集は帝王の作歌をいとまず。十四代よりおの
十二代をぞ御号とのみ。武孝謙二代をぞ
作製作歌なりとぞ。延喜の比までは
ぞ。ぞ。ぞ。

きてしかりけれど。ぱ集より。万葉よりいとゝ古きを撰ばれしこと序に書のべたり。おのく入たり。第三の奇をいはゝくきあり人のいとくおれを持ち人ゝ九ぐうりなどおのくしゝぐにくきわれど。万葉を四よ月ざ新しをたゝれたり。さしも殊勝なり古今集よ。古体乃歌乃まゝにいとゞ富なる人もありさ。延喜の比八第三集を打たれく学ぶ。ぢとみゝたり。村上の御時源順を。和名乃抄を作り。文道よ有をおゝに名儒なれど。ぢたゝく歌乃ゝを乃ぞ他よ有ゝたれど後撰ば撰書をしく。梨壺乃五人の師一ありたに万葉集をゝとゝ。帝よりなほ撰ばれ人ぐ元和を。異伝異説よ後でいのりくるとぞ。ぢゝ代よ人の

ゝゝゝ和をあもぐ。皆昭ゞ鶯尾よ付ゝ寄ゝ。おれゝしく第三集を人の乃ゝ舟ゝくゝ和とぞなれゝ。まゝよく乃ゝ。ぢゝ。假字よゝく歌ぐゝふ。古ぢゝ万葉。假字乃歌ゝ一首ぐあゝ。ぢゝよいゝゝのまゝを哥の心ゝを古れゝ人ゝ月ゝふ。ひゝゝ古ゝゝきゝゝあれゝゝを古れゝゝ和ゝ。ゝゝひゝゝん乃。

ゝゝおれゝ万葉を撰ばれあり。法見新撰ゝとぞゝい。ぢぐゝひゝゝゝゝと古れゝ。おれゝを古ゝゝ和ゝゝ。

ゝゝあれぐ。ぢゝよ八行ゝゝ乃ゝ。

おれ御時ゝゝあゝゝゝ百ゝ乃あゝ代いとゝふゝん。

とハ。技沛ハ。ものしらとハ。孝道乃沛ハ。をさん。万葉と撰を
ふるとゞめを孝道一万葉尾とされハ一ま城の沛ハ
天平勝宝五年ゟ。延喜五年ゟ。百五十三年也
ぱらくハ。ぱんぱ。ぱ。
いつの人乃事をを歌をををる人ゝも人おゝ
とハ。おぼすまゝ。ゝ。ふゝ。ゝ。ゝ。

なる事也。歌乃さ法をくれもをやうなるハ。ゑんてう和尚
ことをくなる紀事をとゝあるゝ。いてゝゝたるといふをえん
ところとゝいふる。たゝえなり。遍照僧正ハ。言峯の宗貞也
父安世を。桓武の御子也。たゝるゝと閑院の大臣を嗣よ結
てそゝゝとゝ。姓氏結て言峯とゝ。大納言大将よいさ
ふゝゝよ宗貞を。仁明乃御時ハ左ゝゝ近ゝて。蓮華
乃ゝ初めて。蓮人歌なり。仁明崩御の御ゝ。ふゝゝて。蓮華
大師乃宮ゝ入ゝ出家ゝて。大師とゝ。ゝ。
蓮世ゝ。文徳御悩乃時。宗貞ハ加持ゝ。
よ。法験ゝゝあるゝゝて。法眼よ叙ゝ。
任ゝ。僧正ゝなる。延暦寺に住ゝ。僧綱
名なり。晩お家乃人ゝゝゝ。お唐院乃拾封乃宣旨

と蓮華ゝ。蓮華大師乃聖霊をゝ。人官ゝゝゝとゝ
え蓮華ゝとゝ。ゝゝを。ゝ。ゝ。
花山僧正とゝ。歌の体ゝ。
なり

流みゝゝ。ゝ。ゝ。

如とうかのあでくるよう和ちうそ。我出家乃分なれば
おちうると人ようるると。如良むよいひうをうる地者そ
山遍路をでとをくたーと去ろうり。此三首の哥を
あてはうせられうぷく吟味をへ
あうをうの乃ちひういるれをうりて三祭たうす
ちうある花のうをくて白ひのうれうこと
とへたうひうの欲をそんあまりて河をうるどうあふ
花乃ふをうれど。白ひのうたうが。艶よあをれうる
とうり哥の換遊玄なり。遍路乃うれさうよ菓子乃
欲乃ところを入金をたうべえぬ而あるあーき哥他
ううべうをとあをれどう遍路菓をいづをもえうる而えぬ
而乃はあるあをたうひうふをぬむんふく人をうる

新くまおうりき。伊勢殿宮小寄西をうる事、乃
繪事なり。又二条の后姫乃又条の后より同宮の時寄西
しうるにせうとの人くいをどうりてをうぶうをうて
出髪乃なでつまれうふ下向をぷ人のあるまひ伊勢
をのうりうりくうり一く人程
月やあらぬ春や昔乃うをうぬ我身ひとうをとの身にて
春うりみふ月をれどう月を春もぷて。秋の月乃春
あうぬが。我身ハをとの身ふてあると。時宜うりたる事
とあり
たうふ月をもめてあれをれをれをれを人の老とうりの
行乃上をてし。拍一よ寄一ぬる事のつをれど老とうれば
おううふ月をもう人よ。さみを十ふふなれど。月のごとく

よくゝゝぞと。我身をおもひしらるゝ也　おもふことハ
ゆゝしき乃物七八きといへ共。月をもめでゝとハ。愛
を専一きとなり。秋月　明月　圓月　この三字ハづゝとゝむ月
乃字をとゝゝゝゝゝゝゝゝなり
ねゝゝゝゝゝの愛をゝゝゝゝゝゝゝゝ

とあり。序にくさ山なるより
深草乃みくとの沖國志にこゝにつきなるべしとと
とへ。一条院御宇に沖國志とよハみこゝ紀とよむべきなる
沖くらむとあり。こゝ也。
苔のふるさと霞乃谷ふかきにて。
仁明崩御を。雲の谷ふかきにて。天下くらやみたりたる也。仁明紀深草乃帝とよび
まるるなり。ふるさと霞乃谷とよめり。此をもふまへ
とよめるなり。
宇治山乃僧正せんそうのうたに。
あるにいにく。桂月を入るふ曉の雲ふかくるゝこと
とハ。桂月が哥を。河ゝにあるべ。姫路あるふたゝ示

桂月を入るふ曉の雲にあつるやうなるといふ
おくれを乃雲にあへふ月のこゝろおくれたる也
或説桂月ハ。こゝ山に隠居乃ゝハみこゝあれどゝ。ゝ人
とゝきこゝ。但考仁和の帝乃勅をうけて。和
哥式をたてゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
陸奥物語乃事也。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
哥仙のゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
花撰。ゝ。序ハ撰花とも。不審。
和哥式をつくる。撰花基泉とゝ人をふくゝ出さ
撰花ゝ。ゝ。ゝ。基泉が哥ゝハ

本ちうちみくうつる谷の嵐のうちの毎乃ちりゆくうし
又樹下集よ玉櫻哥とて
あづれなんちりぬさいはあれ　櫻ちる乃面の風ふく社の初も
とあり。玉櫻が哥とて
し。或説玉櫻を橘清見孫よ。素見丸が孫。周防守元
殖が子也。醍醐法師なり。後よ宇治山よ隠居ちりぬ
隠居ちる乃ちりぬ
ちる花ちりぬ
ちる花ちりぬ
ちる花

なりとゝもむべし。歌のさ法あるゝなるやうにて強く
どゝよくきこゆるなのやめるふたりきゝとゝいふ歌ハつゝく
よあるがゝうけまどゝもぬけゝうゝぬいくゝ所ゝうゝずゝきう
なの歌をれだとこゝとりる也。をんなをうぶ名郎といふ人
ありぎうるべゝゝだ。みぎ面なり。或説ゝ。をんなを女也
をうをハ老女とゝいり。一条禅閤。倒式乃深秘ちりがをう
ゝ。とおり勢られゝと也。小町がまゝ多的なゝず。仁明
承和乃比の人なり。出羽郡司ゞ女。ぬゝをゝ乃事とゝ。
老後を沈傷ゝく。奥別ゝて死ぎをゝるゝや。一条禅閤
恵見抄。伊勢物語ゝ。或説ゝ中将。二条后をゝ。をんな
をゝりゝことに思ゝせゝゞ。それゝゝ髪をぎゝんをあゝり。
陸奥國八十嶋ゝいゝゝて。小野小町ゞ髑髏乃。紅風の

ふくふにをてもあなあくゝと所歌あゝ紅ゆつをたる
とゝのすゝ。江次第の寸十四巻ゝの部位ゝ。匡房の説也
紅梅とゝとべゝゝとゝゝ。又母ゝ石部ゝふゝなりひゝみちく
へゆゝゝゝしに。姫風のまくふにゝてもあゝくゝ。吉
乃きゝゝ面れど。ゝあゆゝきゝてみをぎどゝ乃月ゝ。落
のまゝゝゞ面ゝる。人ゝよゝゝで。小町ゞどゝ所なりとゝる
をゝゝて。なりひゝあゝをれゝなりひて。ををとハいを
落ゝゝゝと。下句をつくゝとゝゝ。或説ゝ。あゝくゝと
ぬゝあいゝくゝとゝゝまゝとゝゝ。山河又ゝも所ゝ。ゝるの
乃ゝゝを

おりひたくぬれゝや人のみをつゝん愛と云ゝ世ゝ笑ゝ海を
思ひつゝぬまばや人の乃ゝゆる袖あゝと云ゝ云ゝゝべゝゝあは

きこゆるをもとめたいひまなれど歌をうやうて
よむまねをもあれをなりひとをあてゝある哥とも
なみそうはろふ物を世中の人ゝこゝろの花をそゝるる
をゝんらびをうゝ物をゝ人のゝれもてあるゝ
みえて清てよむ流もあり。はゝをゝ大江惟孝が妻と
なりしふんぐりしく。若菜勾行が舞よりうるふ
ぬよりあるを也。文集白居易孫の人ゝ好をあくゝ
おなをうざりしをつくりてをゝるゝ。然不感二人
心仙山花易發あれをゝ
ゝひあれを分をうゝ者の松をたゝてゝ
世よあるゝびあをバ分をうゝ者をたゝてゝ
らだゝるんとなりゝとゝもゝあれを文屋康秀がこゝ

ゝもゝてゝをゝ〳〵で分をゝ者をたゝてゝ
心をゝ後乃なり。右三首乃歌ゝくゝあゝんゝるやうゝ
てゝをゝ〳〵すゝ乃西行工夫をゝべ
ゝゝをゝひあの哥　ゝゝをゝをゝんをゝをゝひなりをゝあ
くゝも乃あゝをゝひゝくゝをゝ
とハ。衣通姫の流ゝゝとゝいゝよ付てゝは歌乃さ海をいゝご
をゝりゝをゝをゝひあをゝ。元稹天台乃石ゝ。仁徳寺乃
ゝゝを也ゝ哥ハ。衣通姫乃結あてゝみゝゝを為ゝくゝをゝ
我をゝをゝをゝひなりゝと。蝶のさゝりてゝ。ゝてゝをゝを
をゝをゝをゝみをゝ。摩訶止観云蜘蛛掛則必有喜事
乾鵲鳴留行人小尚有瑞大焉無瑞。とゝよ歌あゝ
乃あゝをゝひのかゝ文あれゝをゝをゝをゝをゝをゝびあハ

玉津島明神とあらはれます。小町が歌。衣通姫乃ちよ
なりとゝいふ。面白乃事也。武烈ゝ。ちゝ。ちゝ。ひめハ。意
祇天皇乃御子。二流皇子の女。ちゝ。人皇十九代允恭
后也。容顔絶妙にして。ちゝ。也。衣通姫とゝ。てゝ。かゝ
にゝて。衣通姫と号ゝ。允恭使とつゝて。ゝ。ゝ
皇后をたゝうゝ。系ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

大津乃くろめ〜ハろれさ海いやーいて菊おろ山人の
花のうまふやもあれうこと
とハまうを歌をもさ海いやーたきう、おん所山人ハ菊
乃おもさふ所ぢーやもあるぶ。ぬこうあれ。花の陰れ
だいやーき山人なれどいあるにこうとゝ弄乃さ
まるり。志賀の四神黒をもいゝ。園城寺乃地をたり
とゝふ。仁和乃ちでゝうこまで存生をと。投沖ハ。大嘗会
の和歌を献ぢうよしみこたり。或云陰陽の人兵後
擬集ゝり。志賀の唐濤まく稜〜て。緑よあづるよし
みこたり。ハ上六人の歌の的先ハ沖ハおよいうが
ごとく。乃大事まくはゝゆきちゝをといれて歌〜
たるまをなれぢ。よくく了覚〜て。歌乃侍を思ふべき通

思ひ出ぶく。ここ時ハ。ちう乃の習てまうと人たちをや
おもひいでく人のちひ〜きけハ。ちりの乃をれまうこと
くふ。泣を。人をちうぢであるかと通。意ハ人ちうめや
とゝ。

鏡山いさたちよりて見てゆくんまとあるゆハ老やーぬ新小
かゝ見やうとゝ人ぢとて。年経ある我新乃うつるべさふ
あるもど鏡とゝふ名を付てたちう老あるゝ見てゆ
むとゝ。ぢとゝうおりるー。太遍照。菓子。廉秀。長綱。
小町。黒をぢ。六人をちうき代よそ名をあるとゝ。
ハなれ人くうの名をうの新聖へよおあるかゝうの乃をひ
ひろこう。梅よ志を記まれ。新集のことくふおりれとうと
ぢこおのひてそさ海志ちうぬちうへ〜

とハおほいなる六人のあぶさをかきあつめおかれし
ぞ人ぜ人をよハとよぶまでく哥のさほをたつるも
さとらふ
かゝるにたゝとくゝさとハあめ〳〵たちゝめるまゝよの
時ちゝぜ色りよなんもちりめる
とさりゝるよ今をへゝきことハ延喜ぜ集を撰せられ
事のいそれをのべゝり皇天皇とも也上古ふゝ
ひとくみとゝやゝたゝ人代とゝりてたゝくゝさとやゝと
あめ〳〵たちゝめることハ高宗帝よ階下沛宮ゝ也
天下をたゝ給ふ事也寛平ゝ九年十四ゝ沛位
りつゝ給ふ　よりのゝ記九ゝりとハ四月九日
沛位ゝ給ひて九年ゝ九ゝ集をえらひゝ給ふ年

サニゝり聰明叡哲ゝおはゝまして第業ゝりこゝ撰
集ゝ給ふ事なりゝとゝ撰て後代乃亀鏡とも
ゝふ第業ゝ上古乃集ゝ孫皇ゝたゝくゝなれど世あが
ゝと人もすゝゝりふゝて哥の板ゝの世よあゝぬ事多
ゝ歌を学ばんゝハ集をゝ用あてゝゝとゝりゝハちゝく
ゝゝどゝ山ゝにゝりてゝも寛平ゝ後の人ぜ板ゝとゝ
がゝべゝさゝりゝ宮家ゝゝ也ゝ仏ゝの勢ゝらまたり
あゝまゝゝさゝおゝんゝうゝゝゝこゝぜゝゝゝ乃あゝまゝてゝ
まゝひゝさゝぜほゝむゝゝみ乃ゝ也ゝくゝ山のふゝとゝりも
ゝゝくゝおゝゝゝゝて
とハ延喜乃あゝゝさ沛ゝゝゝこゝぜゝゝ八鴻乃ゝ
でゝくゝたゝゝとゝ沛巌。義忠とゝ。八鴻ゝ。日本國の

吳石也はたらくのうつくしきまでかくれなしとて
ひろさおちんめぐるこのうぶ
とハ沖心乃ひろく人民をめぐるまハたくを山れ
ぬ法ゝりも高きゝ也つくるを山法右ぎさやゝにいよ
ゝくるゝ乃こゝをもれをゝふ法ハあ也と云ゝ西彩ゝまゝかき匿
ゝ歌ゝくかまる走ゝ面はゝ方はゝ方ゝも云ゝ高ゝ
序ゝゝ仁源秋津洲ゝ恵茂苑波山ゝ法測変名
厳ゝあゝ寿ゝ国石砂長為巌ゝ頌洋ゝ藻耳ゝ
秋津洲ゝ日本國乃吳石也おれを石の仁恵を慶若
ゝ序ゝ也ゝ向假字序と同也ゝ何為餐なゝ也へゝ
公任ゝ朗詠集ゝ編入られゝ高字序をかゝて
ゝとゝゝたゝ石もあゝ假字序乃おもむきをゝ法

ゝとゝゝたゝ石をあゝ行れゝ高字序乃文体
花麗ゝゝ仁源秋津洲ゝ恵茂苑波山ゝ乃白絲也ゝ也
序ゝゝむゝ仁体ゝおゝゝてゝゝゝゝ何洲望
ゝゝ文長谷雄ゝ息乃為ゝて去ゝゝ
ゝ石云ゝ文章也　秋津洲ゝ
紀ゝ乃為ゝ大日本ゝ秋津洲伊豫苑紫洲ゝ
ゝ隠岐佐渡ゝれゝ八洲ゝ
ゝゝゝ八常陸國ゝ苑波山の禁
おゝんめぐゝ乃かぎゝあゝ山ゝゝゝかまゝ八ゝ
ゝ乃ゝ何ゝゝゝ也ゝ禁ゝゝ也
ゝゝゝゝ

とハ。延喜帝門孫持乃改とそ。給ふいとて。法華を捨
たまふあまりよ。継絶興廃とて。あえてうるとはぐ
すこれうるとおこし給ふまま也
今をみそなはし後の世ともつくらはまとて延喜天皇四月
十八日よ大内記きよとをのもと沖書乃ところのあつらう
きのはらゆきちきの乃うしのさう宿おもしうちれうる
太政乃府生こふのあるみのらふおを勢られて万葉よい
らぬあうる紀哥こうくのとをさとてまうくめのひてうん
うきをうあうふ
とハ。ちをとをひ後の世ともつくられとて。延喜天皇四月
十八日よ。友則貫之。祝恒忠岑。四人よ作を出されて第
業ありいくぬあうる紀欲撰者の哥をとをまくめ給ふ也

友則ち。歌集秋の歌まで乃撰者也。前尾をまくて
卒もと。友則ち。亦ちくで准まうる乃をんうめ乃をれ。
准為乃孫ちれでうる杉夢のたどれ乃ちをとくう
沖書の亦れあつうりとハ。沖書紙。貫之ふあづまくう
和歌亦也。面目ちくびる紀事ちうぱう。極さハ。文
轉ぐ。ちをとをくびう。初撰乃歌。吉ふ中子よくく。偽さ
ふふまうり。ふうれを。夢うくもつよをう勢よまうづとを
ざれを。人をいさかをとをくまと古今の歌ばれ也。宮内
百人一首よあれうくとくれうりたうちあるや。桜
ちうあれ。ちうる春の歌。ば集をえくひたる後にちうふ
まや。拾遺集よあれうさいまうり。祝恒ち。まれ。貫乃やこへ
あやう。桜ち。わぐやどの花ちんぐてくうの哥。忠岑ハ。

宮國大納言隆房卿たるゝ。内裏にてゝ。乃つまにてゝ。
えらばれの哥をつゝまれて。公卿乃ほつゝられ人となれる。
名誉ある。人に。結句撰者となる。冥加とゝひ。名誉
なる。事也。哥をつゝまれ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
前集の後ふ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

いまたれどもはゝ乃京物よりて物ハことふ文者も懸
なるにより て。物をゝぶにゝ ゝ ゝ ちゝめてとゝゝ
かゝゝきたにとゝ
とハ。文乃初なり
郭公ゝゝつゝゝゝゝをゝあちゝさなくまゝゝまゝゝゝゝ雲らゝゝ
をみちをゝ
とハ。秋の初なり
雨ふれゝゝ雲ゝり山乃紅葉ゝゝハゆゝゝゝゝ人の袖ゝへゝて雨
雲とゝんゝふいゝゝまて
とハ。みゝれ初なり
名ゝゝゝまゝ月とゝんゝまてふ古聖乃里にふれゝゝ雪
又雨雲よりまて雨をとゝ初めひゝ人をゝいゝひ

とハ。かゝの初なり
かゝゝつゝゝとふゝゝふゝをゝゝゝゝて雨ゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝ
雨雲もちゝゝ野乃後ハゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん
秋雨夜ゝをとんゝく書をまゝひ
とハ。意れ初なり
秋ゝ紀乃下紅葉乃付ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

手祭とも云
あふさきるはなをもいろぬるくさくの哥をなんえらそ物
なもまひろうもをへくちうとをまさうつまて古今ヨりふ
とうの
とは哥はなをもいろぬるくさくの哥は雜旋哀傷
物名雜体たとれ事也くさくとは稚くさき哥部を
なもうの次第はお後不同なれどもだ濁ととりて也
ぢうとは千首　もこ重こは共巻也うこ千首あまり
いまこれどこ也千ヨりとうの文ともの字ヨ仮まり
なもれとも千哥文と物をとく和漢の也和これおれば
千百首など也こうばこあうべきふ大数をもこう
ここ〻〻し千載集も古今の例として千百八十首を

千載集とかきり八雲御抄ヨ千拾抄ヨ古今集哥数千百首短
歌とうあり古とこヨ乃歌数私ヨ動く序ふ六義六巻
春上六十八　春下六十八　夏巻　秋上八十　秋下六十五　冬巻　賀廿二
別巻一　旅十六　物名巻七　恋一八十三　恋二六十四　恋三六十一　恋四　七十
恋五八十二　哀傷巻　雜上七十　雜下六十七　短哥六　旋頭四　神祇九十八
大哥巻二　以上千百十一首はの減歌十一首也
或説哥ども哥をどう生て哥を新撰せ〻ば古伝ふ仮て
哥ヨ下向しなりうるふ延喜崩しふ巻流なくて
新撰とかなて私乃家集ニなこる和ありを序を哥を
自書なりふ昔延喜ヨ御宇屏世ヨ云為固人ヨ
哥合撰歌集ふ古今ヨ千篇ヨ然ヨ揚大数千首
とうの中ふお後の伝ヨ私云同貫注ヨ仮ヨ古今

集ハ春夏秋冬恋ハ十成せるなり雜撰三百六十首を撰ぶ
しるし。古と歌三百八十首と載て。と云撰者と云也とい
へり

かくれたるこひあつめえられて山下水乃ながれたるこの
ごとく乃数おのく注をりぬ是ハとゝあるとゝ川の流るゝ
うゝこゝをさゝあくゝとされるのいとゝなるゝこひのこ
ろあらんき

とハ。集えられて。歌の数おのくつゝりぬ是ハ今を
あるとゝ川乃流を流ふるゝ恨をさゝあくゝ。てゝ
こひだゝりぞなるゝこゝと。流ゝをといひくゝ上の注くゝの心
を結ゝとゝなり　山下水とハたえた溪乃ながれ
おのくといふん料也

ゝゝ。あ首乃哥のこゝろをゝゝ
世界ハ行ゝつゝあるゝあるとゝ川ゝゝ流れ出ゝゝ世ゝなゝ
我ゝゝゝちゝふゝやちゝゝ流ゝさゝれるの巖ゝゝゝて苔のむゝゝ
ゝゝ迷ゝゝくゝゝ河ゝゝ表のむゝ白ひゝゝくゝくゝくゝ
名ゝゝゝ我の表乃ゝゝゝ流ゝゝゝれを
とハ。それゝくゝ河とハ。哥ゝとハ下。撰者の云乃事なり
云字序ハ。笠河とゝゝゝゝゝ。枕河ゝあゝゝ。ゝを
ゝくゝゝゝゝ大ゝとゝゝゝゝゝ

ゴトクトヒトシク切ク。消息乃前のとよむべきなり
加河を人のみふおそりうつ所乃てゝろふをちかりへこと
なひく雲れをちかね昭廉の形さゝ一ハつゝゆきらゝ表
世ゝりおなしくひまれしまれ時よあつるをたんよろこ
ひある
とハ。男ゝ山下乃よあつ新古。つい人の耳におそりつく
うゝ乃ゝをちに男へどく。早ゝをゝる也。をちかおさゝ
男ゝらゝ山世よおなしくまれあひ山集をえゝゝる
新時よあひあつゝどゝろ乃ゝをひまくゝ乃ゝとゝ
をゝをひく雲ハたちね。昭廉をおさゝ一とゝをん料也
ぱまま乃時よあつゝををたんよろこひあつゝとゝよゝゝ
まゝく。皆自滝乃白のたゝぶ紀をり。男ゝらゝがとハ。自滝

乃河流云。海をとゝはゝ。自滝の白とて。をゝ多の流ゝ
あゝゝざれどをぱまを。とゝを。茶もおそれもあゝい
をれをゝをあぶゝ也
人まゝなくなりふゝれと寄の事をまれゝかゝ
とハ。人まゝなくなりゝをれどとハふのゝをハをゝ字也
ひをまゝなくなりたを。をゝぶ下多也。男ゝ山也
ゝ乃ゝて。新乃事とゝぶまゝと。お乃早下にゝゝて
自然をゝゝ。たゝれ人のゝいひをゝばゝくゝゝべき河
をゝ。まゝ字ハよハ。嵬乎人九既没和寄不在新哉
山河を海浪ゝ四寸才九云。文王既没文不在茲乎。とゝ
ゝと紫をゝたゝ多也。人をなくなりゝをれどゝ云河
男ゝく和歌乃ゝをゝ山ゝ乃ゝをゝ山ゝ乃ゝをゝ字ハ

を見たる代とたるかとつよ後合もろ面。は淀後れ和
をおりひとそへてもろ聊腓ちれど。歌代はもぐろう
ろべきまりとそ
みとひはうちりことさうあれ　ひうの　ひゆさうふ
ともは寄乃ものあるとや
とハたとひはうつりまさうたの　ひうの　ひ極さう
ふともとそふ寄乃りハとぐまりて。ろうまり西
まりさと面は河又いう方へむまろ事たどふとれ世
又ハもべうざろまり面。むうハくやう乃事大稲たり
を代ハうくのことき乃事をよく舟へて書ぐさ也
序などふが稲よもづくるみとあうぐ。うとまう
むうも。河毎にうくく思ー面ー て。後よ雑ちれやうふ

海もべきたり　は欲乃もぐあるとやとハ。寄の文
字乃まりう
まう稱のいとたとえた松の紫ふのちうう粉ちーてまさ紀
乃ろうたくはたうり多れ紀久ーくちまれうを
うこれ横ともちりまりのこうろとえうこむ人をおりそ
ら乃ほを乃ろうことくふいうーへをあうさてとうとひ
さうめりも
とハあとやぐさハ糸たうぐ。松乃糸ふちうう世ぐ。英碎
蕾ちぐうくこうちんあり。多れ紀久ーくとぐまれうば
とハ。苔蒙帝の時。会頼とう人多れ書ふあろ是
紀をとんうく。文字をつうまり也。ちうれぐはもぐの久ー
くとぐまれうぐ欲のさ紀をちうぐまりのんをさうん

えてこゝむかしをおもひそこゝろ乃月をあらためごとくいにしへ
とあつまりて延喜聖代のときにいたりて四りんと延喜を
ときとハ古今の二字をとおきてこゝろこゝろとぞ

古今和哥集と號すること事　古とハ當集なり神代の歌
萬葉集乃ことをとりて云今とハ今延喜聖代乃
時をさして古今とつけたり集乃號　初文ハ續万葉と
いふ字序に古今とたゞいまと今古と号をもて後古
今と字あらためたる延　和哥とハ和國乃哥とつけ
集をあつむる延万えうこゝろ和歌の二字なり
古ハ万葉の二字哥なれバ和哥と號
せんといふおもしろし　哥は人の智あり紀なりよくれ
ばこゝろ乃まこと也　序序序